

巻頭言

守り続ける忍耐と変える勇氣

航空の歴史は短い。米国ノースカロライナ州キティホークの海岸でライト兄弟が世界初の動力飛行に成功したのが1903年だから、まだ110年余である。1回目の飛行距離が120ft (36m) だったというから、今の大型旅客機の主翼の片側の長さだ。機体も12馬力のガソリンエンジンも、オハイオ州デイトンという地方都市で自転車店を営んでいたライト兄弟の手作りだった。新聞報道を見た高名な物理学者が、空気よりも重い機械が空を飛ぶはずがない、何かの間違いだろうと否定的なコメントをしたという。

航空管制の歴史はもっと短い。飛行場で離着陸機に旗で合図する“flag man”が出現したのが1910年代、郵便飛行無線局が情報提供と高度調整を行うようになったのが1920年代である。世界初の民間旅客機どうしの空中衝突事故は1922年に霧雨に煙るロンドン・クロイドン国際空港付近で起きた。いずれも国際線の複葉機で、視界が悪いので道路沿いに飛行していた両機のパイロットが地上に気を取られ、前方を見ていなかったために正面衝突したと伝えられている。

その後の技術進歩と航空産業の発展は著しい。今も急激な変化が続いているし、今後も変化は続くだろう。そこで疑問なのが、歴史は繰り返す、歴史を研究すれば現在や将来の問題解決の参考になるというが、その法則は歴史の短い航空分野でも成り立つのだろうか、ということである。軍事専門家は古代ギリシャ以降の戦史を研究し、技術がどんなに進歩しても戦略レベルの本質は変わらないという。遠い未来の宇宙戦争を描いたSF映画のスターウォーズで連邦国家の難しさのモデルにしたのは古代ローマ帝国だという。政治や社会の基本的図式は、数千年の時代を経ても変わらないということらしい。

歴史では似たようなことが繰り返し起こる。経済における景気変動のように長期的な周期性がある現象もあるし、技術革新のように個々には別なものでも社会への影響などは類似のパターンで推移することが少なくない。だから、過去の歴史を学べば今後に起こり得る問題を想定でき、ときに有効な対応策を考えることができる。受験生向けの「過去問題集」が、重要な知識を問う問題は少しずつ形を変えながら繰り返し出題される傾向が強いという理由で役に立つのと似ているだろう。

しかし、過去の成功経験を過大評価し、同じ方法を繰り返し続けるのは危険である。過去には無かった新しいものが出現したり、誰も経験したことのない未知の状況が起こったりすることがあるし、相手も学習するからである。「成功体験の復讐」とは、過去の成功体験に固執して同じやり方を繰り返し、大失敗してしまうことをいう。人は一度成功すると、そのときの特殊な条件や偶然性などは考慮せず、安易に一般化しがちである。そしてその方法が唯一無二の対応方法だとして、金科玉条のように次の世代に教え込む。それを学んだ人達は目の現実や条件の違いを考えず、教えられた通りまじめに実行するので大失敗してしまうのである。成功も失敗も、客観的な原因分析をしておくことが大切だ。

知識経験の豊富な専門家ほど、新しいことに拒否感を抱きがちだ。ライト兄弟の初飛行から2年後の1905年に、若き物理学者アルベルト・アインシュタインが特殊相対性理論を発表した。宇宙観を根底から変えた画期的なものだが、当時の偉い物理学者達は理解しようとしなかったという。今や航空機の航法に必須のGPSの精度維持に、その後の一般相対性理論と共に応用されている重要な理論である。

航空界に限らず、どんなに時代が進んでも変えてはいけない原理原則があり、守り続けるには相当な「忍耐」が必要である。また、変えるべきことは思い切って変える「勇氣」も大切である。そして一番大切なのは、変えてはいけないものと変えるべきものを見分ける深い「知恵」であろう。